

# 「韓国 の 白鳥 見聞記」

本 田 清

## 洛東江のオオハクチョウ

KALのシンボルマークが「ハクチョウ」だと知ったのは、空の上であった。大韓航空のパンフレットの表紙には「ハクチョウ」の写真が用いられ、英文の解説にはそのいわれが述べられていた。日本と韓国を結ぶ人間交流の空のかけ橋として白鳥号が飛ぶ。

1982年11月24日13時、新潟空港を飛びたったKALのジェット機は、2時間30分たらずで金浦空港に着陸した。現地旅行社の李さんが待っていてくれて、さらに釜山へ向けての国内便に乗りかえる。

釜山までは1時間余りの空の旅。上空から見下す韓国の風土・ハゲ山が多いのは朝鮮戦争でナバーム弾などで焼かれたためとか。いま韓国では植林日が制定され、この日は大統領以下全国民がいっしょになって植林に精出しているという。

地表のあちこちに、大小の鏡を散りばめたように光り輝いて見えるのは灌漑用水池である。このことを知ったとき、韓国がいまや水鳥の天国であることの意味がわかりかけてきた。

釜山・洛東江の河口に吹きつける寒風は厳しかった。幸いにして空は晴れ渡っていたが、マイナス15度はあろうかとも感じる外気は防寒ジャケットさえ突きさす。

マイクロバスから降りて堤防上に立つと、目の先に白い群れが見えた。「おい、ハクチョウだぞ。」「やっ、いるいる。」とたちまち寒さを忘れてしまった6名の日本白鳥の会の面々。思い思いに観察態勢に入る。テレ・スコープの三脚を立てる者、カメラに望遠レンズを装着する者。

茫洋として広がる洛東江河口のデルタ地帯、そこに残された広大な中州には枯葦が繁り、白い穂先が寒風にさらされていた。この中州全体が韓国の天然記念物に指定されており、そこに依存し生育しているすべての動植物が護られている。

堤防上からは、到底全容を読みとることはできない。われわれは船外機つきの小舟を二そうチャーターし、分乗して観察することになった。このデルタ地帯を一巡するに3時間を要するとのこと。

上流へ向ってエンジンをひびかせながら舟は進んでいく。中州にあさる無数の水鳥が飛びたつ。舟が過ぎ去ると、さあっと一旋してその場所へ舞い降りる。舟は岸辺のハクチョウの群れに近づいていく。ハクチョウは首を上を伸ばして「コウ・コウ。」とさかんに警戒の声を発する。70メートル、50メートルと距離をつめると、近いものから次つぎに水を蹴って舞いたった。

「オオハクチョウだ。」と誰かが叫ぶ。ゆうゆうと舟の上を飛びすさる彼ら。

洛東江は、コハクチョウが多いと聞かされていたわれわれは、群れ飛ぶ数百羽のオオハクチョウを見て、意表をつかれる思いで見上げていた。

舟を岸辺に乗り上げ、中州に上陸する。烈風の吹きさらしに堪える中州の葦群は、丈が低く見とおしがきく。

500メートルほど先の黒っぽい群れが頭をもたげた。スポッティングスコープのピントを合わせ凝視

する。すべて「ヒシクイ」であった。概算3,000羽以上。ヒシクイは大型のガンの一種であり、わが国においても天然記念物、筆者はこれの同種を福島潟で見慣れているが、3,000羽の大群に遭遇したのは初めてである。

見渡すと、遠い中州の周辺に白い群れもたくさん望まれる。岸边にあさるハクチョウであった。この数もほぼ3,000羽と見る。まさに水鳥の楽天地といえた。

河口に憩う色とりどりの水鳥のなかで、一際目立ったのは、白と黒のツートンカラーで装う「ツクシガモ」、そのあでやかな舞い姿がいまもまぶたに焼きついている。

### 周南貯水池の水鳥

釜山市内からマイクロバスで約2時間、洛東江河口から80キロメートルほど逆上った田園地帯に、「周南貯水池」というハクチョウの渡来地があった。この場所を知っているのは、韓国でも極く限られた専門家だけで、案内してくれたソウル大学林学科自然環境保全研究室の李宇新君も、初めて訪れるところという。

車窓からのぞく農家の庭先には、牛がつながれており、老母が唐ガラスを干しているのが見える。軒先には「味噌玉」がつるさされていて、三、四十年前の日本の農村風景を彷彿させる。

ようやく尋ねあてた「周南貯水池」は二つに分かれており、合わせるとほぼ鳥屋野潟（わがフィールドのひとつで約160ヘクタール）ほどの広さがあるかと思われた。

白いものと黒っぽいものが入り混って動きまわっている。まぎれもなくハクチョウの群れ、そしてマガンとヒシクイの大群。

近づいて見ると、貯水池の沼は全体に浅瀬となっており、マコモ、ハスなどの水草が多いことが読みとれる。いちばん先に望遠レンズにとらえたのは「コハクチョウ」であった。コハクチョウはやはりいた。

洛東江に渡来する約3,000羽のハクチョウは、おおむねオオハクチョウが多いことを確認したあとただだけに、ここにきてコハクチョウの集団に出会えたのは幸運であった。その数300羽以上。オオハクチョウと合わせるとほぼ600羽をカウント。

沼の岸边には民家が並び、牛車を引いて通る農夫や、野菜を頭上にのせて帰りを急ぐ農婦らに行き交う。彼らは、すぐ目の先に無数に乱舞する水鳥にも格別の関心を示す様子もなく、水鳥もまた警戒心をあらわにする様子も見られず、人間と風土の自然が織りなす原風景ともいうべきたたずまいを見せていた。

韓国にもハクチョウが渡来しているだろうということは、これまでいくつかの文献によって察知していたが、実際の渡来地を写真によって具体的に知らされたのはごく最近のこと。この写真は、1980年2月、札幌で開催されたIWRB（国際水禽調査局）代表者会議の折、韓国の鳥類学者のもたらしたものであった。とくに興味をそそられたのは、貴少種のコハクチョウのほか、大陸の奥地から野生のコハクチョウの集団も南下しているという事実であった。以来、筆者と韓国野生動物保護協会の呉要翰事務局長との交流がはじまる。

われわれの訪韓準備中、たまたま例の「教科書問題」がもち上り、韓国における対日感情の悪化という予期せざる課題もしよい込んだ。しかし、こんなときこそ一そうの親善交流が必要だという同志をあ

つめ、勇躍して出発する。参加者は、玉田誠、三浦二郎（北海道）、川嶋保美（宮城）、菊池昶史（茨城）、小山三治（新潟）の諸氏と筆者の6名。

洛東江のハクチョウを観察した翌日の夜、ソウルでは、韓国野生動物保護協会の車均禧会長以下6名の同国関係者が、われわれ一行に対する歓迎パーティーを開いてくれた。筆者は、日本側を代表し、およそ次のようなあいさつを述べた。

「私ども一行は、かねてより念願していた韓国のハクチョウを実際に観察することができ感激いたしました。ハクチョウは生来のコスモポリタンであり、全世界をひとつのものとして雄大に自由に行動しています。したがって韓国に渡来しているハクチョウが日本に渡り、また再び韓国に舞いもどるというようなことも十分に考えられるところです。私どもは、この点今後、両国の関係者による標識ハクチョウの共同観察や、情報交換を深めることによって解明をめざしたいものと存じます。近い将来、韓国におかれましても、ハクチョウを中心とした渡り鳥の調査研究保護組織を結成されることを期待し、やがて結成のあかつきには、一そう提携を密にして、相互に活動が深かまるよう念願いたします。」

このときの懇談で、「洛東江の渡来地（同国天然記念物指定地）が駄目になるかも知れない。」という話をきいた。洛東江は、釜山市民350万人の水ガメである。河口周辺にはご多聞にもれず多様な工場等が進出し、用水需要も増大している。しかも河口に近い取水池は、渇水期の満潮時になると海水が混入してしまうこともある。これを解決するため、上流に大きなダムを築こうという計画があるという。

しかし、この実現には多額の費用を要し、その大部分を世界銀行等からの借金でまかなわなければならない。

この情報をキャッチした同国野生動物保護協会では、世界銀行の約款をとり寄せ研究した。すると、約款には自然を破壊するような事業には貸し出しができないことになっていることをつきとめた。以来IUCN（国際自然保護連合）を介し、この事業に対しての貸し出しをしないよう運動中とのことであった。韓国の仲間たちも「なかなかやるなあ」と思う。

### 青草湖の七羽のコハクチョウ

ソウルからマイクロバスで約8時間、東海岸の東草に向う。東草は漁港だが、近くに海水浴場や温泉などもあり、背後に雪岳山国立公園をひかえた行楽地。

港湾は400ヘクタールほどの海水湖を利用して造られており、この内水面を青草湖という。隣接してほぼ同規模の永朗湖がある。ここに厳寒期、モンゴル方面から南下してくるといふ野生のコブハクチョウ集団が見られる。

1日ばかりでやっと到着した青草湖、港には漁船が停泊し、駆逐艦のような軍艦も見える。手前の浅瀬を見ると少数のコハクチョウが眠っている。さっそく下車して観察態勢に入る。コハクチョウの成鳥6羽、幼鳥1羽のグループであった。コハクチョウが首を上げ動き出すと、湖面に群れていた無数のウミネコが空に舞い上った。

翌朝、同じ場所をもう一度観察したが、コハクチョウの数は前日同様でふえてはいなかった。

案内して下さった慶熙大学助教授の尹茂夫氏は、シーズン中毎週のようにこの地を訪れるという。ソウルからバイクを運転して8時間以上の道のり、大へんな努力だと思う。尹先生の専門は生物、とくに水鳥では同国の第一人者である。

「コブハクチョウは、1月中ばかりにならないと見られないでしょう。私は昨年1月中旬40羽ほどをカウントしました。いまごろはまだ北朝鮮側のどこかにいるものと思います。」と尹先生。そういえば、ここは北側に最も近いところ、東草は38度線以北に位置し、いわゆる休戦ラインもすぐそこ。したがって軍事施設も多いらしく、道路には至るところに関門があって武装番兵が立っていた。

海岸へ出てみると、なぎさに添って延々と畑の畝のように砂が盛り上げられ、その上にまた塞の河原のように小石が積み上げられていた。これがなんと、北側からのスパイの足がかりを探るための触角なのだという。それで、もうひとつのできごとを思い出した。

周南貯水池のほとりでのこと、超望遠レンズを構えていたわれわれの前に、バイクに乗った警官が駆けつけてきて、撮影の目的について職務質問を受けたことがあった。幸い、「望遠レンズ持ち込み領事確認書」を所持していたので、案ずるほどのこともなかったが、あらためて北側と対峙している韓国の現実を目のあたりにする思いであった。

しかし一方、われわれは、建国に立ち上っている韓国の自然保護行政が「自然破壊の上に人間の繁栄を築くことはできない。」として、適切な施策を力強く進めていることを知ってうれしかった。とくに印象に残ったのは、韓国の全土すべてが鳥獣保護圏となっていて、一部特定の場所のみ狩猟解禁区として解放指定しているという点であった。わが国はこの逆で、禁猟区だけを指定し、あとは野ばなしである。

ここで、訪韓以来、われわれ6名が目撃した主なる鳥名をあげておこう。

オオハクチョウ、コハクチョウ、ヒンタイ、マガン、ツクシガモ、マガモ、カルガモ、コガモ、オカヨシガモ、ホホジロガモ、ミコアイサ、アオサギ、コサギ、ウミウ、ケリ、タゲリ、ダイゼン、チドリ、ハマシギ、ミュビシギ、キョウジョウシギ、ジャクシギ、ミミカイツブリ、ユリカモメ、ハヤブサ、ハシブトガラス、カササギ等々。まだまだ見落したものも多いと思う。

おわりになったが、このたびの韓国白鳥観察ツアーで、感銘を受けたことの2、3をしるしておきたい。

洛東江河口でのたまらない寒さにまいって、観察船に乗ることを止めようとした、わが会員の一人に対して、「私は大丈夫、寒くないですから。」とあって、自らのコートをぬぎ捨てて、それを重ねて乗船するようすすめてくれたロッテ観光ガイドの李龍運さん。そのプロ意識に徹した姿には打たれるものがあった。

また、この旅に先だち、「ハクチョウを愛する人は自然を愛する人、自然を愛する人は人類愛を秘めている人です。」とのすばらしいはなむけのことばを添えられ、われわれの文化交流をよろこんでくださった駐新潟大韓民国総領事館領事・朴鎰殷先生に深くお礼を申し上げたい。(本会副会長・新潟支部代表)

#### 韓国の白鳥見聞記一要録

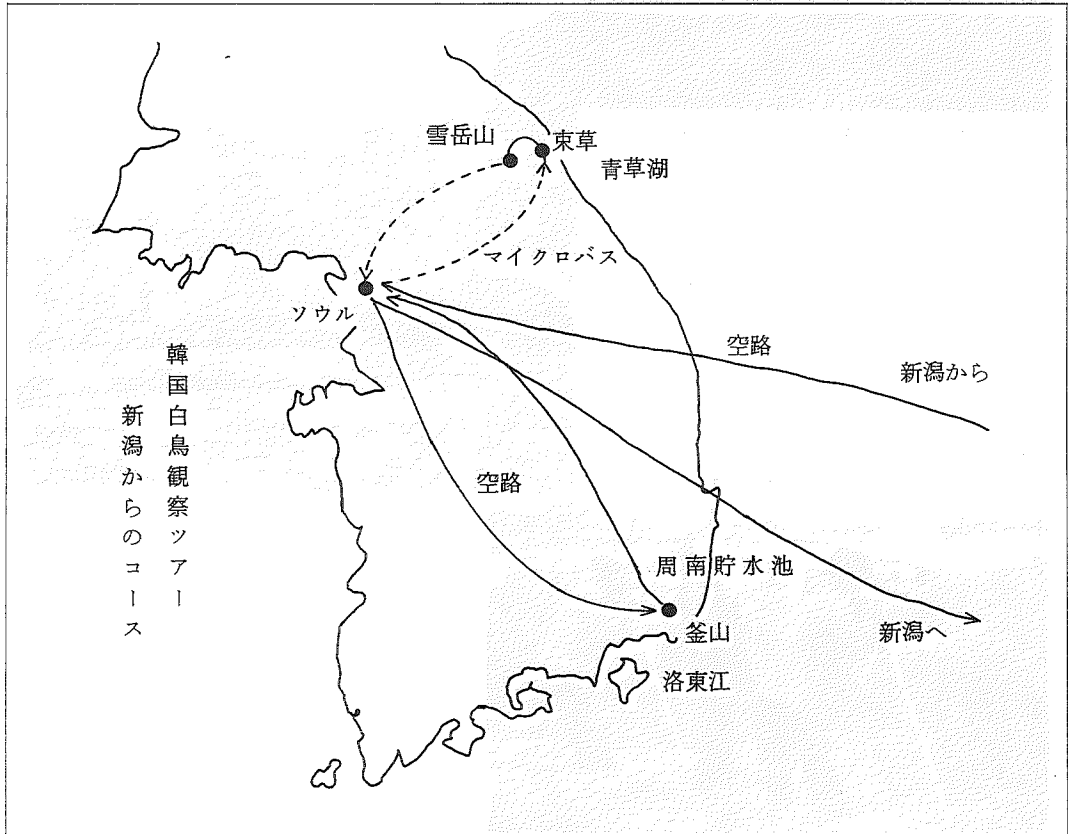
1982年11月24日から29日まで、日本白鳥の会では、韓国野生動物保護協会の協力を得て、韓国白鳥観察ツアーを実施しました。

参加したのは、北海道2名、宮城1名、茨城1名、新潟2名の会員で、新潟国際空港から出発し、即日ソウル、釜山へと飛びました。

釜山洛東江河口中州地帯では、オオハクチョウ 3,000、ヒシクイ 3,000羽以上を観察、周南貯水池では、コハクチョウ 300、オオハクチョウ 300以上のほか、ヒシクイ、マガン多数を観察しました。

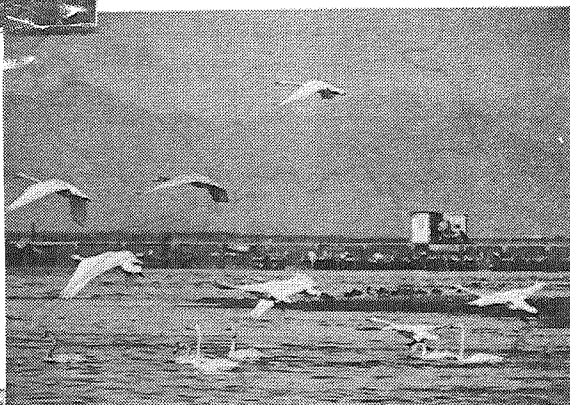
北朝鮮に近い東海岸の青草湖では、コハクチョウ 7羽などのほかたくさんの水鳥を観察しました。

韓国野生動物保護協会の催してくれたソウルでの歓迎会の席上、日本白鳥の会本田副会長は韓国野生動物保護協会の車会長に対し、渡来ハクチョウ類の共同観察の必要を提案し、出席者全員の賛同を得ました。

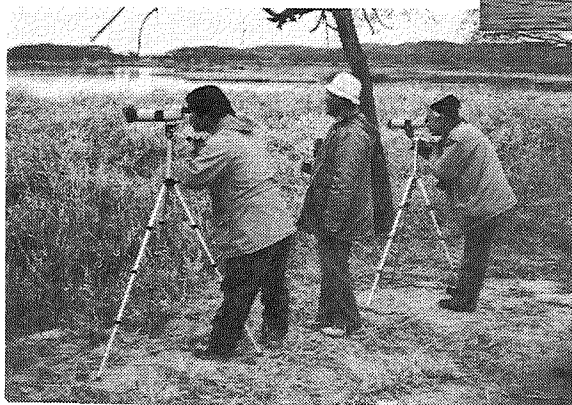




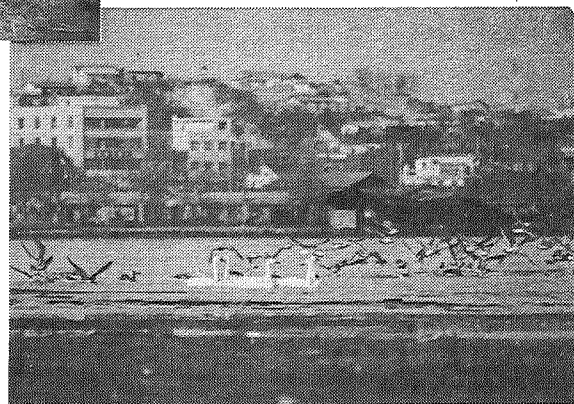
周南貯水池で記念撮影。左から三浦、小山、李ガイド、菊池、玉田、本田、川島会員。



洛東江河口近くを飛ぶオオハクチョウ。



永朗湖で観察中の左から尹茂夫、菊池昶史、三浦二郎氏。



青草湖で見たコハクチョウ